

漢文にもさまざまな文章があります。日本でも古くから好まれてきたものに「漢詩」があります。漢詩は中国の詩のことです。

七〜九世紀のころの中国(唐)は、外国との交流がさかんでした。もちろん日本とも交流がありました。漢詩は、そのころに形式やリズムなどが整えられたといわれています。

声に出して読もう ①

絶句 杜甫

江は碧にして鳥は逾よ白く

山は青くして花は然えんと欲す

今春 看す又過ぐ

何れの日か是れ帰る年ぞ

漢詩の意味

川は深みどりに澄みわたり、その水の色をバックに水鳥はいつそう白く見える。山は青々としげっている。それをバックに花が燃えるように咲いている。今年もあれよあれよといふ間に過ぎていく。いつ故郷へ帰る日が来るのだろうか。

家の人のしるし ↓

声に出して読もう ②

春 曉 孟浩然

春眠 曉 を覚えず

处处啼鳥を聞く

夜来風雨の声

花落つること知る多少

漢詩の意味

春は暖かくて寝ごこちがよいので、夜が明けたのも気づかず、目を覚ますことができない。あちらこちらでも鳥が鳴くのが聞こえてくる。そういえば、ゆうべは風雨の音がしていたな。花はいったいどれくらい散ってしまったのだろうか。

漢文を日本語の文章として読むための工夫とは？ その二

漢字で書いた文を読めるようにふ号やかなをつけた文を訓読文と言いました。さらに、読むとおりに漢字・かな交じりで書いた文を書き下し文と言います。これで、読めるようになったかな？

○白文 歲月不待人。

○訓読文 歲月不レ待タレ人ヲ。

○書き下し文 歲月人を待たず。

○白文 歲月人を待たず。

大伴家持の短歌

学習日 月 日 ()

おとおものやかもち

☆ 次の文を音読し、紹介されている短歌三首をノートに視写しましょう。

音読をしたなら、音読チェックの○を●にしましょう。

最初に紹介するのはこの短歌です。

新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事

大伴 家持(万葉集)

これは万葉集の最後をかざった短歌で、因幡国守だった大伴家持が詠みました。

万葉集は奈良時代につくられた日本最古の和歌集で、大勢の人の和歌がおさめられています。この短歌は、七五九年の元旦に、雪が降り積もる因幡国守でもよおした祝宴で詠まれたものだと言われています。この短歌には、「新年に降り積もる雪のように、良いことがますます重なるようにとの思いがこめられている」という解釈があります。もう一つの解釈として、「寒々とする中、衰退する大伴家の繁栄を願う家持の悲しい気持ちを表現している」という解釈もあります。万葉集には、大伴家持が詠んだ和歌四七三首がおさめられており、万葉集全体の一割をこえています。その中の、二つの短歌を紹介します。

春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ少女

* 春の庭いちめんに赤い色があふれている。モモの花が明るくしている木の下に、いま表れた少女

夏山の木末の繁に霍公鳥鳴き響むなり声の遙けさ

* 夏の山の梢で木の葉がぐれにホトトギスが鳴き声をひびかせる。その遠く、かすかなこと。

音読チェック ○ ○ ○ ○ ○

家の人のしるし ↓

和歌・長歌・短歌のちがいがわかるかな？

和歌：日本に昔からある、長歌や短歌のこと。特に、短歌のことをいう場合が多い。

長歌：和歌の一つ。五音・七音をくり返し、終わりを七音で結ぶ歌。

短歌：和歌の一つ。五・七・五・七・七の五つの部からできていて三十一音の歌。

「読む」と「詠む」の使い方

「読む」本を読む。

童話を読む。
人の心を読む。

「詠む」和歌を詠む。

俳句を詠む。
月を詠む。

因幡万葉歴史館

大伴家持をテーマとしたミュージアムが鳥取市国府町にあります。秋には、大伴家持が万葉集に詠んだ歌を参加者がリレー方式で朗唱する「万葉集朗唱の会」が開かれます。



鳥取で詠まれた短歌を味わおう 学習日 月 日 ()

☆ 鳥取を題材にした短歌や、鳥取県出身の歌人を紹介します。好きなものを一首選び、それを視写したり、音読したりして、味わいましょう。

()のルビは原文にはありませんが、読みの助けになるように、今回付けたものです。

とどろきて水のながるる紙すき場佐治谷あひに一夜寝にける
(さじだに) (ひとよ)

前川 佐美雄 『鳥取抄』

たどりゆく砂丘のなだりひろびろと砂波かぎりなしに美し
(すななみ)

前川 佐美雄 『鳥取抄』

前川佐美雄は明治三十六年に奈良県に生まれました。戦争中に鳥取県八頭郡丹比村に疎開(そかい)していました。終戦後、鳥取県内の各地に出かけて鳥取をまんきつしました。そのえんで、山陰観光旅行普及会からの依頼で『鳥取抄』という歌集が作られました。

砂に生ふるかすけき草を踏みてゆく砂丘のなかの谷の白砂
(む) (む) (さきう) (しろすな)

佐藤 佐太郎 『地表』

大山のなかのみ寺に行くときに水なき谷を幾つわたりつ
(いく)

佐藤 佐太郎 『群丘』

佐藤佐太郎は明治四十二年に宮城県に生まれました。第六歌集『地表』の後半「昭和三十年」に「IV鳥取砂丘」という一連があります。また、四十九才のとき、鳥取の大山をおとずれています。

さくら花ちれ散れうすいくちびるで少女はかるい
(ばな) (ち)

おしやべりやめぬ

杉原 一司 (『花軸』第二集)

杉原一司は昭和元年に鳥取県八頭郡丹比村に生まれました。鳥取商業学校卒業後は地元の安部小学校や丹比小学校に勤務しました。短歌に対して、ほとぼしるような情熱を燃やしましたが、志半ばに二十五才でなくなりました。

引用 覚書 杉原一司 (竹内道夫編)

☆ 五首の短歌の中で好きなものを一つ選び、視写しましょう。
また、選んだ短歌の中で、特に好きな表現にサイドラインを引きましょう。

家の人のしるし ↓



A (トリリンが話した感想)

ゆでたまご作りの感想

家庭クラブで、ゆでたまごを作りました。ゆでる時間によって固まり方がちがうので、おどろきました。

まず、たまごを洗って、なべに入れます。次にたまごがかぶるくらいの水を入れます。なべをコンロにかけて、点火します。ふっとうするまで、さいばしでたまごを転がすと、黄身がかたよらないそうです。ふっとうしたら、ふっとうが続くくらいに火を弱めて、ふたをして10分間ゆでます。それから、穴じゃくしでたまごを取り出して、水で冷やします。からをむいてたまごを切ってみると、ゆでた時間によって固まり方がちがいました。わたしは、10分くらいゆでたものが好きです。…

トリリンは、家庭クラブで「ゆでたまご」を作りました。その感想を学級の友達に話しました。そのとき、作り方をわかりやすく教えてほしいと言われたので、Aの感想とBのような説明書を書きました。Aの中の言葉を使って、Bの「説明書」のアイ・イ・ウに入るふさわしい文を書きましよう。

B (説明書)

ゆでたまごの作り方

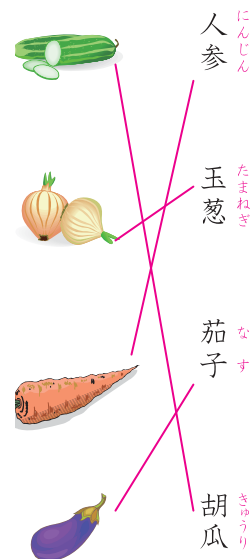
- 1 材料 たまご
- 2 準備するもの なべ、さいばし、ボール、穴じゃくし、たまご切り器
- 3 作り方
 - ① たまごを洗って、なべに入れる。
 - ② アたまごがかぶるくらいの水を入れる。
 - ③ なべをコンロにかけて、点火する。
 - ④ イふっとうしたら、ふっとうが続くくらいに火を弱めて、ふたをして10分間ゆでる。
 - ⑤ ウ穴じゃくしでたまごを取り出して、水で冷やす。
 - ⑥ からをむき、たまご切り器で切る。

ポイント→ふっとうするまで、さいばしでたまごを転がすと、

黄身がかたよらない。

家の人のしるし→

漢字で書くど？ 野菜編
 ☆トリリンは、おうちで料理を作ろうと思い、スーパーマーケットに買い物に行きました。すると、野菜の名前がむずかしい漢字で書いてあることに気がつきました。次の漢字は、どの野菜のことでしょう？絵と漢字を線でつなぎましよう。



☆ らっきいの家に配られたお店のチラシです。よく読んで、あとの問題に答えましょう。

1 らっきいは、このお店に買い物に行こうと思いました。トリリンにもこのお店のチラシの内容を説明しようと思います。その説明として、ふさわしいもの一つ選びましょう。

1 このお店は、夜十時^xに行っても買い物をする事ができる。

2 アイスクリームは、何個買っても、いつもの半分の値段で買える。

3 感謝セールは、毎週水曜日^xに行われる。

4 セールの日には、お客^x様^{100人}全員が必ず食パン^xをもらうことができる。

(2)

2 チラシの中にある「みなさん、きて」という表現は、店長の立場でお客様に対して使う表現としてあまりふさわしくありません。ふさわしい表現にするために、「みなさん」の書き出しに続けて、一文で書き直しましょう。





(例)みなさんのご来店をお待ちしています。
◎このようにしていい文章にするといいですね。

家の人のしるし ↓

5周年記念感謝セール

11月3日(水)の1日限り

お買い得商品

牛肉コロッケ 1個75円が 2個で100円 	アイスクリーム 半額 	たまご 1パック 88円 
みかん 1袋 295円 	ショートケーキ 50円引き 	サンドイッチ 半額 

☆すべて消費税込みの値段です。

たまご1パックを100名様にプレゼントします。

みなさん、きて

スーパーマーケット とっとり

営業時間 午前9時～午後9時

漢字で書くこと？ 海にすむ生き物編
 次の漢字は、海にすむ生き物の名前です。漢字の読みを線で結びましょう。



(鳥取県の魚)

牡蠣 雲丹 鮭 秋刀魚 鯨
 うに かき くじら さんま ひらめ